第27回 オリヴィエ・ピコン（ホルン）

インタビュー・構成　中 東生

隣国フランス出身であるにもかかわらず、現在バーゼルを拠点に活躍する彼の名前はここスイスの金管楽器界に広く知れ渡っている。ピコン氏にとって「少年時代の手の届かない夢」だったバッハ・コレギウム・ジャパン（以下BCJ）との共演は、海外公演を含めて今回が5度目となる。来日を前に、スイス国営ラジオ局SRFスタジオでザンクトガレン・バッハ財団とのロ短調ミサを録音した後に設定されたこのインタビューでは、疲れも見せず2時間半にわたって音楽への情熱を語ってくれた。その人物からは、国境、ジャンル、媒体とする楽器を超えた音楽への飽くなき探究心と情熱が尽きることなく溢れ出ていて、「真の音楽家の姿とはこのようなものなのだ」と多少の驚きと共に再認識させられた。

ザンクトガレン・バッハ財団の録音にて（撮影：筆者）

ザンクトガレン・バッハ財団の録音にて（撮影：筆者）

●バッハとロ短調ミサについて

—今回のプログラムであるロ短調ミサは貴方にとってどのような存在ですか？

バロック音楽の頂点の1つだと私は捉えています。その楽譜はまるで宝石のようで、目で追いながら聴いているだけでも毎回価値のある新発見が得られます。スイスのザンクトガレン・バッハ財団の録音には5年ほど前から参加しており、今までに20曲ほどの録音に参加しました。その信頼感をベースに今日はロ短調ミサを録音したのですが、この曲は昨年もBCJと演奏して、その後、このバッハ財団と共演して、それからBCJとの欧州ツアーに出るなど、両方のオケを行ったり来たりしながら、それぞれのオケから学んだことを別のオケとの共演で活かして、この曲へのアプローチがどんどん深まっていると感じます。

—バッハの中で一番好きな曲は何ですか？

ヘ長調ミサBWV 233のグローリアです。BCJとの最初のCDでも録音しています。エモーションの宝庫のような曲で毎日聴き続けても飽きません。また、アーノンクールの録音した作品は基本的に全部好きです。BCJのCDの中ではカンタータBWV 50が一番好きで、学生の頃は、車の窓を開けて、このCDを大音量で聴きながら運転していました。あまりにも好きなので、街中の人達に聴かせてあげたかったのです（笑）。

—バッハにおいて、ホルンはどんな役割を果たしていると思われますか？

宗教曲以外では、ホルンは狩りや森、自然のシンボルですが、宗教曲ではカンタータBWV 79や91 のように

神の強さ、偉大さ、祝福を表していると思います。

そしてこれはほんの一握りの人しか気付いていないようですが、ホルンが声部を支えることによって歌の表現力を倍増させる働きがあると、私は思っています。宗教曲ではコラールによって、そのカンタータの主旨が歌われるのがバッハのシステムです。そのコラールの声部をホルンが輝かしい響きで縁取り、聴衆に向けて提示するのです。

昔はコラールが生活の中に馴染んでいました。今で言えばビートルズの曲のように、誰もが知っているものでした。その慣れ親しんだコラールをホルンが支えることで、上手くいけば、周知のメロディに超人的な光、性格を与えることができるのです。温かく、心の琴線に触れるホルンの音色と肉声が混ざることで、人の心に真っ直ぐに入っていくインパクト効果を生むのだと思います。ホルンは合唱に、まるでターボエンジンのような活力、さらなるエネルギーを付け加えることができます。

私は、まるで森などの屋外で「イェ～イ！」と叫んでいるようなイメージでホルンを鳴らします。ヘ長調ミサBWV 233のグローリアは、合唱にも英雄的で活気のあるライン、祝福が感じられるところが好きです。ブランデンブルク協奏曲などもそうで、ホルンがよく鳴っていると「最高！」と抗い難い魅力を感じます。このホルンの使用法は、後の作曲家にも影響を与えました。幸福感や活力を表現できるのがホルンという楽器の強みなのです。

—「英雄的」というとトランペットも想起させますが、その違いはどこでしょうか？

私が「英雄的」と表現したのは、より貴族的で叙情的な意味です。私にとってトランペットは、戦争、勝利、王の権力においての英雄的な楽器です。一方、ホルンは英雄の内面の感情、勇気、気高さ、高い理想主義のシンボルです。「魂の高貴さ」がホルンにピッタリの表現だと思います。

2016年BCJヨーロッパツアー、アムステルダム公演

●BCJについて

—4月のBCJ欧州ツアーでも、ロ短調ミサのQuoniamを連続9回見事に吹かれたそうですが、1時間以上ステージの上で待っていて、冒頭からオクターヴの跳躍が出て来るこの曲を掌握する秘訣は何ですか？

まずは精神的鍛錬が必要なので、私は英語でセンタリングと呼ばれるテクニックを習得しています。これは、日本の合気道にも通じる大変有効なテクニックです。長い間舞台上で出番を待っていると、色々考え過ぎたりして失敗を招くものなので、まずは譜面を見ながら音楽の進行を追い、合唱部分では一緒に歌ったりして演奏に参加し、余計なことを考えたり、士気が下がったりしないようにしています。この点BCJは合唱の声量が充分にあるので、一緒に歌っても邪魔になりません。そしていよいよ出番という時には、第一に呼吸、第二に丹田を意識したセンタリング、第三に上手に吹けている様子を想像して瞑想し、邪念を寄せ付ける隙を与えずに吹き始めるのです。そして何よりも「今までも上手くいった」という経験が、落ち着いて吹き出せる自信になっています。

BCJはオケと合唱の気持ちが通じ合っていて、とてもよい雰囲気なので、その中に一緒に座ってポジティヴな気持ちで出番を待つことができますし、いざ立ち上がると、これから吹き始める私の音色を楽しみに待っていてくれているマサアキがいます。指揮者自身が不安を感じている人の棒で演奏すると、それを一生懸命隠そうとしてくれていても、その不安がこちらにも伝わってきてしまうので難しいのですが(苦笑)……。

実を言うと、私はもともと速いパッセージや高音は得意だったのですが、大きなインターバルを跳躍するのは苦手でした。それを克服するためにフィリップ・ファーカス(Philip Farkas アメリカのホルン奏者)の奏法からも学びましたが、私にとってより効果的だったのは、ハリウッド映画に出てくるような、アメリカの50～60年代のオケが奏でる映画音楽のホルンパートなどを聴いて、インターバルを浪々と歌い上げ、レガートで繋ぐイメージをしっかり耳に焼き付け、そのイメージ通りに吹くように練習したことです。

—鈴木雅明氏が貴方のことを「休憩後もステージに出てずっと音楽を共有してくれた初めてのホルン奏者」と語っていますが、どのような心情からそうなさっているのですか?

どこのオーケストラともそうするというわけではないのですが、BCJでは絶対にそうしたかったのです。特にツアーだったので、自分もBCJの一員として参加しているという誇りを表現するシンボル的な行為でした。

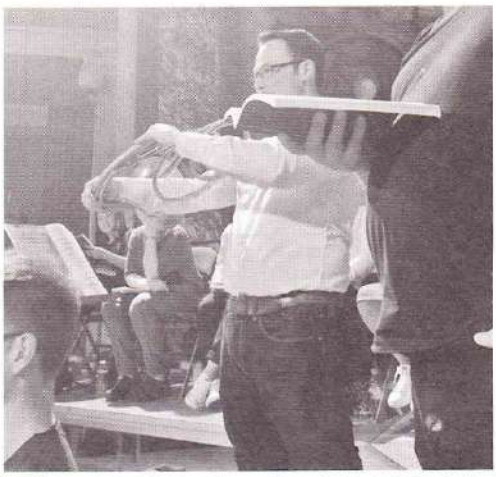
それに加えてBCJは全員が情熱をもって演奏します。合唱には鳥肌が立ちますし、マサアキも最後の一音まで感動を伝えてくれます。そしてBCJではソリストも合唱を歌うのですが、BCJと共演するソリスト達は世界のトップレベルで、普通は大金を払って聴きに行かなければならない歌手達ですから、すぐそばで、それもただで聴ける機会を逃す手はないですよね(笑)。

前回BCJに呼んでいただいたツアーでは、広島原爆投下70周年にロ短調ミサを捧げました。BCJが広島を訪れたのは初めてのことだったそうで、とても強いインパクトを受けました。私のアリアもうまくいき、とても感動的でした。被爆者の方々に何か良いものを献呈することができてよかったです。その時は休憩後客席で聴いたのですが、その年に聴いたコンサートの中で一番素晴しいものでした。

—BCJとの出会いは?

16～17歳の頃だったでしょうか、既にバッハファンだった私に、誰かがBCJの録音を薦めてくれたのです。カンタータBWV 40、60、70、90が収録されたvol. 15のCDは、私には革命のように聞こえました。その後師となるトーマス・ミュラーがそのCDに参加していたのは運命的でもありますね。ブックレットに書いてある鈴木氏のコメントも大変興味深く読みましたし、録音に参加しているソリスト達も私がファンだった人達でしたので、その頃の私にとってBCJは、遠い、手の届かない夢のような存在でした。いつか生で聴きたいと願いながら、そのCDを聴き続け、あまりにも聴き過ぎて、またどこにでも持って出かけたので、すっかり傷だらけになってしま

サントリー音楽賞受賞記念コンサート
「ミサ曲 ロ短調」(2015年7月29日)
写真提供:サントリー芸術財団



2016年BCJヨーロッパツアー、リハーサル中のひとこま(撮影:鈴木優人)

いました。2枚買っておくべきでした(苦笑)。

2011年、そんな夢の存在だったBCJからカンタータプロジェクトの招待を受けたのです。どんな大きな夢でも念じれば叶うものなのですね。

しかしちょうど福島の原発事故の直後で、当時はどのような状況か全く解らず、こちらで流されていた情報は大袈裟な報道も多かったので、散々悩んだ挙げ句お断りしてしまいました。これは今でも後悔していることです。「これでもうBCJから招待されることもないだろう」と覚悟していたのですが、2013年に欧州から4人の吹奏楽器奏者を招いてカンタータBWV 205、207などを録音する大プロジェクトに、再び声をかけていただいたのです。

その後ルター派ミサ曲の録音にも呼んでもらうことができたので、「これはもう、絶対に師のトーマスと一緒に録音したい」と思い、彼も連れて行きました。ソリストは大好きなペーター・コーイをはじめ、大御所世代は全員私の好きな人達でした。鈴木秀美さんとも共演しました。その上、それまで聴いたことがなく、知らなかった私と同世代のソリストも優秀な人達ばかりでした。特に凄かったのは、ハナ・ブラシコヴァです。私はその頃「自分もまあまあのレベルまで来たなあ」なんて思ったりしていたものでしたが、彼女に出会ってからは「まだまだ上があるんだ」と悟りました(笑)。

学生の頃からずっと聴いていたBCJと、彼らが長年に亘って実現させてきた録音全集プロジェクトの最後に一緒に録音できて、今まで与えてもらってきたものに、何か自分もお返しができたようでとても嬉しかったです。

BCJとの共演は、回を重ねる度にどんどん良くなっていく実感があります。そうして私達の歴史が紡がれていくのです。例えばマサアキと「サンクトペータースブルグはよかったねえ」とか「アイルランドでは舞台の端まで出て吹かなきゃいけなかったねえ」などと懐かしい昔話ができるのは、私にとって一種の財産です。

前回の共演時も空港から直接練習場へ行かなければならず、機内であまり寝ていないので疲れていました。それでも「若いから大丈夫」と高をくくっていたのですが、思った以上に不調で、マサアキに「ホテルに寝に行ってくれ。コンサートで会おう」と言われたのです!これも信頼感があるから出来ることだと思うと、貴重な思い出です。

ロ短調ミサにおけるホルン奏者の出番は3分として、今回も3分×3公演=9分のために約24時間かけて日本へ参ります。私の家族には到底理解できないことのようですが、私にとってBCJとの共演は、それだけの価値があってあまりある体験なのです。

(撮影:筆者)

●ホルン奏者への道

—ホルンという楽器を選んだのはどうしてですか?

私は音楽的な家に育ちました。叔父はホルンの先生で指揮者でもあり、カウンターテナーとしてジュネーヴで学んだBenoit Magninです。アルプスの田舎町で生まれた私にとって唯一見たことのある楽器が叔父のホルンだったのです。6〜7歳の頃、楽器を選ぶ必要が

あった時にホルンを選んだのもそのためでした。それから長い間叔父にレッスンを受けていました。

そのような叔父の影響で、いつもバロック音楽の中にいました。アーノンクールが好きだったので、ブランデンブルク協奏曲もモーツァルトも古楽器でばかり聴いていて、それが普通だと思っていました。自分にとってホルンは音楽を表現する手段ですが、ホルンを吹くということ自体は私にとってとても簡単で、今まで困難に出会った記憶がありません。小さな頃から慣れ親しんだ楽器ですし、叔父とはジャンルを問わず何でも吹いていたので、高音も低音も自由自在に吹けるようになりました。通常、ホルン奏者にとってバッハの曲は高音が多く難易度の高い作曲家なのですが、それでも私にはやはりとても簡単に思えます。

—ホルンの良いところ、難しいところはどこだと思われますか?

温かい音で心に染み入る一方で、情熱的で英雄的、そしてエクスタシーも感じられるのがホルンの魅力だと思います。難しいのは、出番が少ないので忍耐力が必要なところ、そして精神の強さが要求されるところです。

ホルンを吹くということ自体はそれほど難しくなくても、第一音はやはり苦労します。その他、「響き」に興味のない共演者や指揮者と演奏する時は難しいと感じます。この楽器の言語と反していることを要求されると苦労するのです。

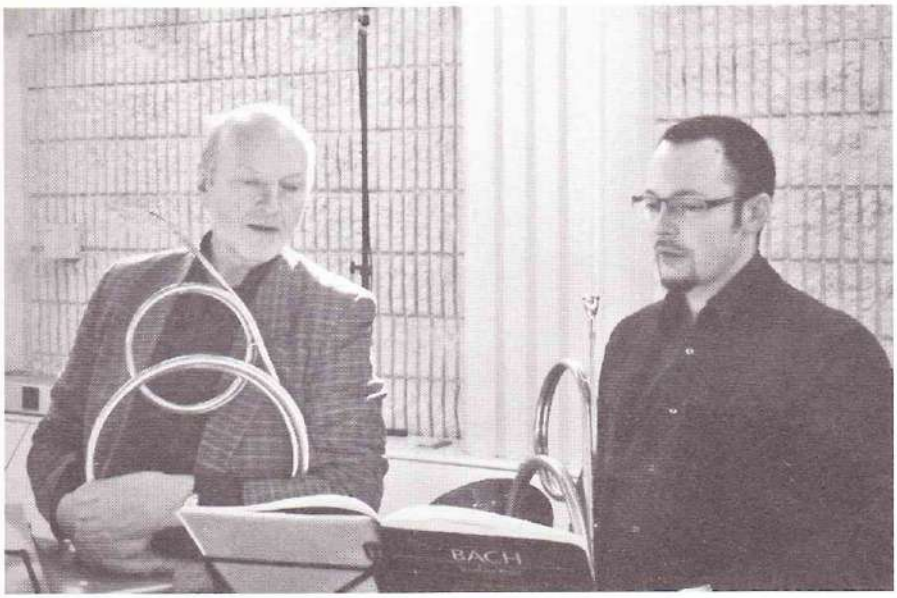
ホルンの基礎で一番大切な要素は耳です。同じ音を何通りにも出せる楽器なので、自分が出すべき音を想像すること、そしてよく聴くことが大切です。歌真似が上手に出来る子供はホルンに向いていると言えるでしょう。

—音楽家になろうと決心したきっかけは何でしたか?

子供の頃からラジオを聴くのが好きでしたが、私が15歳の頃、ミシェル・ペトルチアーニという、骨形成不全症でありながら世界最高のジャズピアノを弾く人が若くして亡くなったというニュースが流れました。この時に初めてジャズと出会い、その未知の世界にのめり込みつつ、クラシック音楽と併せて独自の表現で音楽を奏でていきたいと思ったのです。ハービー・ハンコックのCDを買い漁り、テルデックから2000年に出たバッハのCDを聴いて、まるで麻薬のようにのめりこんでいきました。この頃はカントリーからメタル、アイリッシュからスコッティッシュと、様々なジャンルの音楽をむさぼるように聴いていました。

そうこうするうち音楽学校に進学する決心をし、一番近いリヨンに入学したのですが、そこで恩師ジョエル・ニコル先生に出会いました。当時は、音楽家として生計を立てるためモダン楽器を学んでいたのですが、オーケストラのオーディションを受ける段階になるとある種のストレスを感じずにはいられませんでした。オーケストラ団員になるべきだと解かってはいるのですが、自分がやりたいジャンルはやはりバロックなのです。そんな葛藤をすぐに理解してくれたニコル先生は、リスクを負ってでもバーゼルへバロック音楽を勉強しに行くようにと勧めてくれたのです。

20歳そこそこでバーゼルに住み始めた僕にとって、バーゼル・スコラ・カントルムは「バロック音楽のお菓子を売っているお店」のような、まるで天国のような所でした。学内、図書館、先生達、学生仲間、全てが素晴らしく、可能な限りのレッスンを聴講したりしていました。しかし、バーゼルに来たのは音楽自体を勉強するためだったので、ホルンの練習はほとんどしませんでした。ルネッサンス音楽にも目覚め、歌のレッスンにも夢中になりました。楽器を変えようかと真剣に悩んだこともあります。しかし幼少の頃から学んできた楽器は第二の皮膚のようなもので、自分が目指す音楽的レベルに達するのはホルンでしか実現できないだろうと悟りました。歌ならば大好きなペーター・コーイみたいには歌えないと気付いたのです。そしてある時、トーマス・ミュラーがヘンデルの《王宮の花火の音楽》を吹いているのを聴き、その8小節で「自分がしたいのはこれだ」とひらめいたのです。



BCJレコーディングでトーマス・ミュラーと共に(2014年2月、神戸松陰女子学院大学チャペル)

—師のミュラー氏もBCJと何度も共演しているホルン奏者ですが、スイス人の職人的技術の確かさと気高さを感じさせると評価されています。彼からはどのようなことを学びましたか?

トーマス・ミュラーはバーゼル近郊の出身で、その評価通り典型的なスイス人気質を持っており、それを学びたいと思っていました。スイスの時計作りを思わせる細部まで行き渡った完璧な緻密さ、ルター的といえる謙虚さ、あまり誇示しないそのスタイルは上品です。そして、「待つこと」も彼から学びました。彼は忍耐の名人で、まるで武道の師範のようです。例えばBCJと録音したカンタータBWV 40はまるで仏様のように吹くのです! 私はこのカンタータを吹く時はそれを真似しています。

彼とは本当にバロック時代の師弟のように、行動を共にしながら学びました。一緒に旅行したり、共演したりしながら、彼の吹き方を完全に真似して習得しました。私は真似をすることを恐れてはいません。体格や個性などは人それぞれ違うので、完全に真似ても全く同じになることはあり得ません。録音を聴いても、「あ、トーマスらしい」「これは僕だ」などとすぐに聴き取れます。

繰り返しになりますが、私は音楽理論を学ぶためにバーゼルへ来たので、トーマスにホルンで師事したのは偶然でした。それまでは彼の演奏を録音で知っていただけでしたが、生で聴いたことにより自分の目指す道が見え、彼にとっても私は初めてのホルン専攻卒業生だったので、特別な縁のある関係だと思います。1、2年前にも一緒に録音をしました。

—師のスイス人気質と比べて、フランス人特有の性格とはどんなところですか?

ん〜、それはリスクを冒すこと、英雄的でロマンティックなところでしょうか。BCJとの共演を重ねているジャン=フランソワ・マドゥフや私は、フランス人として、よくリスクを冒した吹き方をします。

—日本人はどの位置にいますか?

フランス的に近いというか、そのリスクを理解してくれます。戦に向かう侍に近いのかもしれません。例えば鈴木氏はホルン奏者を立たせて、上に向かって吹くように促します。それはとてもフランス的で私は好きですが、スイスではあり得ません。日本人は、リスクを省みない姿勢を尊重してくれて、100%のエネルギーで戸惑わずに受け止めてくれます。

例えば、私はピアニストの上原ひろみのファンなのですが、彼女はそのスタイルの最たる例です。常に0か100か、忘我の境地で弾いているのです。

●日本の印象

—日本には何度もいらしていますが、どのような印象をお持ちでしょうか?

日本にはBCJと3回、他のオケとの共演を含めると9回行っています。日本は「音楽が大好きな国」「音楽が日本社会に不可欠な国」だと感じます。私のモダンホル

ンはヤマハ製なので浜松にも行ってみましたが、最高の技術と質、モチベーションの高さ、そしてそのサービス精神に驚きました。私はギターやベースも弾くので、いつも日本の楽器店で新しい楽器に出会うのを楽しみにしています。故障のない信頼できる技術力は、日本のホテルや新幹線を彷彿とさせます。日本制作のCDも格別で、音楽に対する情熱を感じるので、私は日本に行くと楽器店での買い物とジャズクラブ通いで相当のお金を使ってしまいます(笑)。

それから、終演後にサインを求められるのは、私にとっては日本でのみの体験なので、誇らしい気持ちにさせてもらえます。

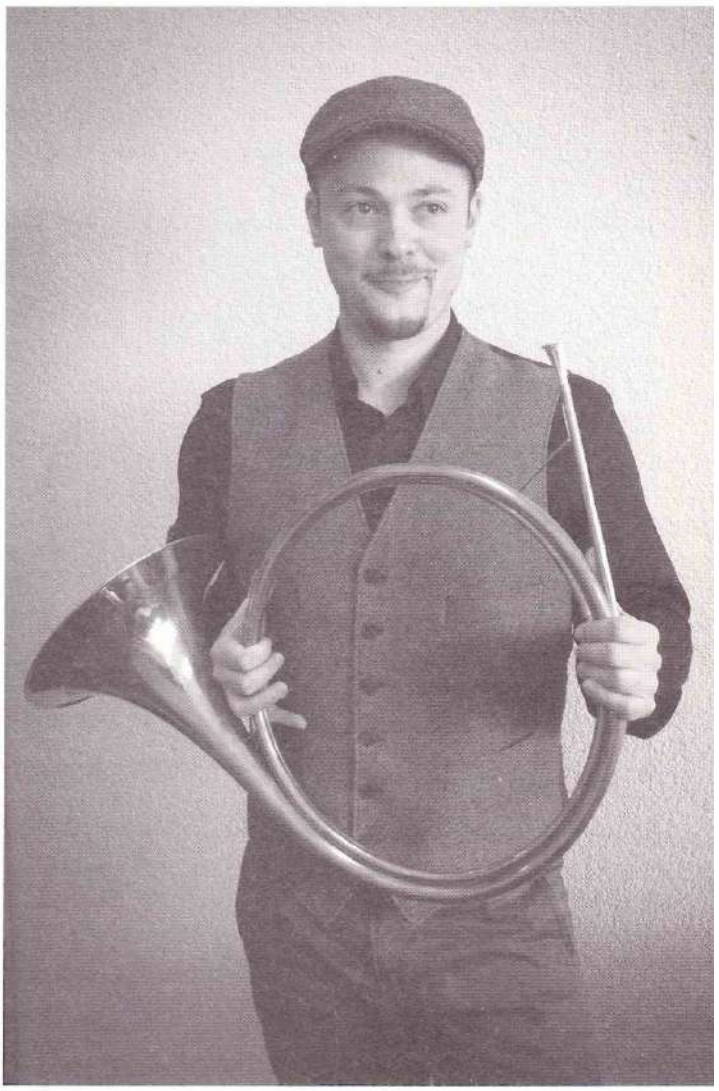
—ジャズのデュオを組んでいらっしゃることは、知る人ぞ知る、ピコンさんの別の顔ですね。素晴らしくムーディでスタイリッシュなアプローチは、バロック音楽と対極の世界ですが、「ジャズとクラシック音楽を併せた独自の表現」を追求した結果ですか?

はい、最近ライヴコンサートを開く時間的余裕がないのですが、HEIMAというそのデュオも私のホルンにとっては不可欠な存在です。ジャンルや楽器に捕われず、音楽の素晴らしさを追求したいのです。

作曲やアレンジもしますし、キーボードやトランペットも演奏しますが、ジャズ界にホルンは少ないので、これからも発展していく可能性を感じます。

—バッハ・コレギウム・ジャパンの聴衆の皆様へ一言いただけますか?

日本でのように温かく迎えられたことは、どの国においてもないことなので、私は日本の聴衆の皆様に大変感謝しています。終演後にも質問を投げかけられるなど、音楽に対する深い理解を感じます。単に「輸入された奏者」という感じがなく、心からの歓迎を受けている実感があります。また世界で一番の拍手も贈ってくださいますので、日本に行く日を心待ちにしています。



オリヴィエ・ピコン(ホルン)
Olivier Picon, horn

1984年フランス・アヌシー生まれ。リヨン国立高等音楽院でフレンチ・ホルンを、バーゼル・スコラ・カントルムでトーマス・ミュラーのもとバロック音楽を学び、スコラ・カントルム初のナチュラル・ホルンでのディプロマを取得。以来、コープマン/アムステルダム・バロック・オーケストラ、ルッツ/ザンクトガレン・バッハ財団、ガーディナー/オルケストル・レヴォリューショネル・エ・ロマンティック、クイケン/ラ・プティット・バンドほか多数のバロック音楽演奏団体と共演を重ね、70タイトル以上のCDレコーディングにも参加している。クラシック音楽以外にも、ジャズ・グループ《Heima》を主宰、2014年には初のアルバム Skyward をリリース。